



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫東芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

キリストは永遠の命の源 真理の靈をもたらし

「その生きる水をどこから
持つてこられるのですか。」
(ヨハネ4・11)

四十日間の教会の四旬節は、エジプトでの捕われの日々の後、約束の地を目指したイスラエル民族四十年間の旅を思い起す期間です。それは砂漠を行く旅でした。ある時、水がなくなつたので、イスラエルの子らはモーゼに向かって、「なぜわれわれをエジプトから連れ出したのか。私たちと、子供らと、家畜とを水なしで殺すためにそうしたのか」(脱出の書17・3)と不平を言いました。

脱出の書には、その時神はモーゼに命じ、エジプトでナイル川を打ったその杖で岩を打ち、水をわき出させたと言われています。このため、そこはイスラエルの民が神への忠誠を欠いた場所として、モーゼの記憶にとどまりました。「彼らが「主はわれわれの中におられるかどうか」と言つて主を試みたところから、その場所はマツサとメリバと名づけられた。」(同17・7) (…)

ヨハネの福音書には、別の場所が出てきます。イエスは「シカルというサマリヤの町に入られた。そこにはヤコブの泉があった。」(ヨハネ4・5～6)

砂漠の旅で渴きに苦しんだイスラエルのように、イエズスも渴きを覚えました。そこで、水をくみに来たサマリヤの女に「水を飲ませてください」と言われました。女は驚きました。「ユダヤ人はサマリヤ人と付き合なかつた」(同4・5～9参照) からです。その瞬間から、ある意味で二人の役割は逆転しました。女の向かつて話し始められたのです。

女はわけがわからず、驚いてしまいました。自分がくみに来た井戸の水のことを話しておられるのかと思つていたので。その井戸は、昔、太祖ヤコブの時代に「彼もその子孫もその家畜もここで飲んだ」(4・10～12参照) 井戸でした。そこで私たちも、脱出の書よりもっと古い時代にさかのぼってみましょう。いつの時代にも、水は渴きをいやしてきました。この見知らぬ人は、いったいどんな水のことを言っているのでしょうか。生きる水、とは?

そこでイエズスはサマリヤの女に説明します。「この井戸の水を飲んでまた渴きを覚えるが、私の与える水を飲む者はいつまでも渴きを知らないだろう。私の与える水は、その人の中で、永遠の命にわき出る水の泉となる。」(4・13～14)

ここには四旬節を過すにあたり、欠くことのできない根本的な要点があります。四旬節は永遠の生命を目指して歩みを進めるべき時です。目的地の「約束の国」は、神が人間に約束してくださつたものです。ですから、私たちは細心の注意を払つて「永遠の命にわき出る水の泉」について語るイエズスの言葉に耳を傾けなければなりません。

私たちは、ここで言われているのがたとえであり、偉大な象徴であることを知っています。水は人間の身体的な渴きを、特に暑い時に、いやしてくるものです。さて、永遠の命とはどのようなものなのでしょうか?

サマリヤの出来事から、この「水」が真理を意味することがわかります。第一に、それは良心の真理であり、同時に神とたいへん近い関係にあるという真理です。

ここでは良心の真理について述べられたことがわかります。個人の良心こそ「水の泉」であり、永遠の命への道を指し示すのです。実に良心は神を指し示します。人の全生涯は、良心のうちに秘められた神のまなざしの前にあらわらなっています。

実は、イエズスこそ「靈と真理をもつて」礼拝されるべき神ご自身なのです。「御父はそういう礼拝者を望まれる。神は靈であるから、礼拝者も靈と真理をもつて礼拝せねばならぬ。」(ヨハネ4・23～24)

こうして救い主は、神の民がヤコブやモーゼの時代から世代を重ねて続けてきた長い旅をお始めになりました。

サマリヤの女は答えます。「私はキリストと言われるメシアがおいでになることを知っています。その方が来ればすべてのことを知らせてくださるでしょう。」

イエズスは彼女に仰せになりました。「あなたに話している私がそうだ。」(同4・25～26)

キリストは、人類が世代を経て歩んできた道に足を踏み入れました。そして自らの人格の内に「永遠の命に湧き出る水の泉」をお見せになります。キリスト自身が泉として、この水をお与えになります。御父がキリストの名によつて送りたもう(ヨハネ14・26参照) 真理の靈を人類にお与えになります。復活と聖霊降臨の日にご自身で使徒たちにお与えになるのです。

枝の主日

聖ペトロ広場にて

1 「ダビドの子にホサンナ。賛美されよ、主の名によつて来る御者。天のいと高き所にホサンナ。」(マテオ21・9)

今日、イエズスはエルサレムへお入りになります。典礼は復活祭前の一週間を指し示しています。

今日、群衆はイエズスを取り巻き、その中には若者たちの顔も見えます。特別な意味で、今日こそ若者たちの日なのです。ここ聖ペトロ広場を埋めた皆さん、そして世界のあちこちで、教会の祝う枝の主日の典礼にあずかる若者たち、今日は皆さんの特別な祝日です。

今日、ローマ司教として、私も皆さんと共にキリストを出迎えに行きます。「賛美されよ、主の名によつて来る御者。」皆さんと共に、また全世界の若者たちと共に。典礼歴年の間、各地で別の日に祝われる若者の祝典に、私も霊的に参加したいと思えます。(…)

2 ナザレトのイエズスはただ一度だけ、ご復活を迎えるため、エルサレムへ堂々の入城を果されました。そしてただ一度、後の日に証明されるであろうことを成し遂げたのです。しかし同時に、イエズスは今日の訪れの内にとどまっておられます。ただ一度限り、イエズスは、本日の典礼で

聖パウロが宣言することを歴史の中に記されました。「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿を取り、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。その外貌は人間のよう

に見え、死ぬまで、十字架の上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた。」(フィリッピ2・6-9)

神の子イエズス・キリスト。本性として御父と等しいのに、身を卑しく、むなしくして人となり、十字架上の死を、人間的に言えば最も恥すべき死をお受け入れになられたのです。

自らを空しくすることによって、イエズス・キリストは全ての上に称揚されました。神はイエズス・キリストを高め、御子の称揚を人間と世界の歴史に結びつけました。キリストにおいて、人間とこの世の歴史は神の基準をそなえています。「父なる神の栄光をあがめ、イエズス・キリストは主であると宣言する。」(フィリッピ2・11)

3 ここに集い、同時に全世界でキリストと共にエルサレムに入城する私たちは、今も続くキリストの過越の秘義を告白し、告げ知らせ、宣言します。この秘義は教会の中で、教会を通じて、

人類と世界の内に続いていきます。私たちは、この賞賛すべきへりくだりの秘義、主が自らを空しくして永遠の命を与えられた秘義を告白し、告げ知らせ、宣言します。

このキリストの過越の秘義において、神はご自身を完全に啓示されます。神は愛です。

このキリストの過越の秘義において、人間が余すところなく啓示されます。キリストは、人間を人間自身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかになさるのです。

(現代世界憲章、22番参照)

実際、人間は死に屈服し、無とされてしましますが、一方では高められ、尊厳と栄光を受けたいというやみがたい願いを抱く存在です。これが人間の限界であり、地上で必要とすることがあります。これが人間の尊厳、奪うことのできない、全ての人權の基本となる尊厳の意味です。

過越の秘義においてキリストは人間の立場に身を置き、人間という存在そのものになりきっておられます。これら全てを自身の内に受け入れたのです。人間性を確認すると共に、人間を越えています。

エルサレムに入った時、キリストはご自身の苦難と同時に全ての人々の苦難を背負い、その悲惨さよりむしろ、贖いの力をお示しになりました。

命である。私を信じる者は死んでも生きる。」(ヨハネ11・25)

4 そこで私たちも、キリストと共にエルサレムに入りましょう。「賛美あれ、主の名によつて来る者。」

キリストのかたわらを歩む私たちは、数々の民族、国家、文化と時代の言葉を話す教会です。事実、教会はあらゆる言語でイエズス・キリストその人の秘義、過越の秘義を語りまします。人間の限界は、あ

眠れる信仰を呼び覚ます

「私は世の光である。私に従う人は命の光をもつであろう。」(福音書・答唱)

兄弟姉妹の皆さん、今私たちが過している四旬節は、自らの罪を認め、神と和解する悔悛のための好機と言うにとどまらず、光に照らされて信仰を再発見する歩みの時でもあります。この聖なる期間、常にも増して豊かに与えられる神の言葉を通して、聖霊は炎のように信者の復活祭の過越を照らしだし、罪の暗闇を打ち払ってキリスト・イエズスが「全ての人を照らすまことの光」であることを悟らせてくれます。そして信者は、キリストに属する者という自覚を深め、消えることのない光へと続く道をキリストについて歩む決意を

特別な方法でこの秘義の中に包み込まれています。この秘義において、人間の限界は神の力に、どんな力よりも強い、愛の力に浸されていくのです。

私たちは、誰もがキリストを内に抱えています。キリストは「ぶどうの木」(ヨハネ15・5)であり、人間と世界の歴史はそこから発してきたのです。キリストは神による新しい命のパン種です。来るべき御方に、賛美。(四・八)

新たにすることができまします。この光は、本日の聖書朗読の中心をなすメッセージです。イエズスの力で目を開かれた盲人の姿は、闇から救いだされ、「光の子ら」となって死から生命に移った全ての受洗者の姿でもあります。若きダビドのように、彼らは聖霊によって祝別された王、預言者、司祭の民であり、教会を築き上げ、人類史の中に神の王国を建設します。

生れつきの盲人が癒されたというこのエピソードは、私たちがこころした黙想へ誘います。福音書の、とりわけキリストのみわざを目にしたヨハネの見解によれば、奇跡とは、自然の法則では説明のつかない「不思議」であるのみならず、まず何よりもメシア

「お知らせ」 長らくご好評・ご利用いただきました「教皇様の声」専用保存ファイルは、ただいま品切れとなっております。ご了承のほどお願い申し上げます。

説教・講話・書簡等の抄記

「十字架の道行」(第三版)

主のご受難の場面観想から生まれた書。黙想のしおりとして七十の考察を加える。
定価二二〇〇円 送料三〇〇円 カセット・テープ一巻 定価二二〇〇円 送料三〇〇円 御申し込みは精進教育促進協会まで。

による救いの「しるし」なのです。イエズスの行いの物質的なレベルを超えたところを見よという招きです。信仰の光に照らしてみれば、主が人々にお与えになった解放と契約の賜が、イエズスのわざの内に見出せるはずで、教会は復活祭の秘跡の中でイエズスのしるしを忠実に繰り返して解放の思い出を新たに、信者たちを神の生命に導きます。これこそキリスト教共同体が最初からキリストの奇跡に読み取った意味です。

こうした訳で、洗礼志願者のキリスト教入信の秘跡に向けての準備期間中、生まれつきの盲人の癒しが洗礼の秘跡の意味を啓示しているところから、福音書の最も重要な箇所と考えられているのです。要理教育は今も大切で、いやむしろ、今日なおも不可欠であることは明らかです。洗礼によってすでにキリストに「照らされている」人であっても、再び罪と無知の暗闇に落ち込む可能性があまりから、復活された御方の光にひたされる必要があります。そうすれば「光の子ら」としての召し出しと使命を再発見し、この世に生きる間、柔和、正義、真実という実を結ぶことができるのです。

● 私たちの考察の中心となるのは、再びイエズスです。世にいる間、「私は世の光である」と仰せになっています。恐れと迷いの淵に沈む人々に向かって、言葉と行いでご自分が光であり、人生とその最終目的に究極の意味を

与える御方であることを示されました。また、この光に対して心を開くか拒絶するか、決定を各自に任されたのです。その意味でイエズスは「裁き」を完成させ、見えない人が見えるようになり、見えないと思いついて入る者は盲目になるようお定めになったと言えます。洗礼を受けた者の象徴である「癒された盲人」は、喜んで光を受け入れ、救われたうちの一人です。キリストの癒しを受け、シロエの池の水で洗われて、今や肉眼のみならず、魂の目で見えるようになつたのです。気運れと周囲の冷たい目、疑わしげに問いかける人々に取り囲まれながら、少しずつ彼は自分を癒してくれた人が何者であるかを知り、預言者、神の子であると信じ、ついにその前にひれ伏して礼拝します。

この話には、まだ続きがあります。信仰の光によって彼は「新しい自分」を発見します。もはや罪と盲目の状態にはいません。厳格に律法を守っているというだけの理由で自分たちが正しいと自負する人々から爪弾きされた、道端の物乞いでもありません。今や彼は「新しい被造物」です。人生と周りの世界を新しい光に照らして見ることが出来ます。それはまさしく彼がキリストと一致し、キリストに従う人々の共同体に迎え入れられたからなのです。兄弟姉妹の皆さん、このすばらしい福音書のページを通じて示される「人生の教訓」を急ぎ入れてください。(…)

● 今日、私たちは定めなき状況の中にいます。一方では科学がますます発達し、科学研究の分野での、また経済・社会との関わりにおける人間行動の目的はますます明快になっていきます。人の目が届かなかった分野も、開かれつつあります。しかし他方、人間自身はますます不可解になり、次第に自分で自分がわからなくなりました。まるで人生とその最終目的地は、光を通さぬ影の谷間に沈んでいくかのようです。「死の暗き地に住む人々」(マテオ4・16参照)の上に乗った「大いなる光」を告げる喜びのメッセージを再び宣言しなければなりません。もう一度、キリストの光を今日の

世界に輝かさねばなりません。こうして「新しい福音宣教」の責務が生じるのですが、キリスト信者もひとしくその対象となりま。彼らの眠れる信仰を呼びさまし、聖パウロが思い起させるように、もはや実を結ばぬ闇のわざに加わることなく、かえって公然と闇のわざを否定し、主を喜ばせようと念じながら、この世での生活を送らせねばならないのです。

● 起し、洗礼の約束に従って生きるよう促すのは要理教育の大切な務めです。子供たち、ティーンエイジャー、また成人に対して。今の世代は現代世界を覆う世俗化や無関心、宗教的無知の波にさら

されていますが、同時にさまざまなイデオロギーの落とし穴や不毛の混乱と迷いの中で真理を求め、連帯、正義、平和について決定的な問いかけを発しています。こうした健全な危機感を前にして、部分的でその場限りの企てでは不十分です。組織的で系統だった「啓蒙活動」を企画し、洗礼を受けた人々が信仰をよみがえらせて生活の中でそれを証することができるよう、導いてゆかなければなりません。すなわち、キリストのように考え、キリストの目で人生を判断し、キリストのように望み、愛し、キリスト及び兄弟姉妹たちと一致して生きることを教えるのです。(…)

救いの秘跡と教会

教会シリーズ 12

1 「組織的に構成されている司祭の共同体の聖なる性格は、秘跡と徳行を通して行動に移される。」(第二バチカン公会議、教会憲章11番) 今回は、今引用した真理が、伝統的に告解の秘跡と呼ばれる救いの秘跡に反映していることを考えましょう。洗礼を受けた者すべてが担う「普遍的司祭職」は、この救いの秘跡において実行に移されます。司祭職の最も大切な務めは、生命のもととなる神との正しい関係を妨げる

罪を取り除くことだからです。この秘跡は、洗礼後に犯した罪の赦しのために制定され、信者はこの秘跡において積極的役割を担っています。信者は受け身ではなく、儀式的、形式的に救しを受けるのでもありません。それどころか、過ちを告白し、赦しを願うことによって恩寵を受け、罪に対して自ら積極的に戦いをいとみみます。信者は自らの改心が秘跡に含まれていることを知っています。これを理解すればこそ、秘跡に有効にあ

ずかることができ、自らの役割を果たすことができるのです。しかし今日、多くの信者が救いの秘跡から遠ざかっています。その理由として、現代人の精神的、社会的状況の中から、次の二点をあげることができるといえます。

まず一つは、罪の意識が弱くなったことです。あらゆるものからの自由と独立を主張する現代世界の潮流の影響を受けて、神の御前で犯した自らの罪の現実と重大さを認めることができなくなっているという事です。二つ目は、多くの信者が秘跡にあずかる必要性和利益を理解せず、直接神に救しを願うのを好むようになったことです。神との和解に

不変の教え

働く教会の仲介の役目を理解して
いないということだ。

3 公会議はこのような困難な
状況に簡潔に答える指針の
中で、罪を神に対する侮辱と教会
に加える傷という二つの観点から
表しています。「告解の秘跡を受
ける者は、神の慈悲によって神に
加えた侮辱のゆるしを受け、同時
に自分たちの罪をもって傷つけた
教会、愛と模範と祈りによって自
分たちの改心のために努力してい
る教会と和解する。」(教会憲章
11番) 熟慮の結果生れた、簡潔
で啓発的なこの教えは、さまざま
な重要な点を示しています。

4 まず、罪の本質が神に対す
る侮辱であるということ。
罪とは善の掟を破り、悪の支配に
屈し、知りつつ自由意志をもって
創造主の摂理に反抗する被造物の
邪悪な行為です。神の尊厳に対す
る侮辱です。これについて聖トマ
ス・アキナスは「神に反して犯
した罪は、神の無限の尊厳に対し
て一種の無限である」と言える(神
学大全 III, q.1, a.2 ad.2) とはっ
きり述べています。神の愛に背を
向け、神の民、キリストの御血に
結ばれた全ての人のために示され
た契約と愛の掟を破ること、神の
愛を拒絶する不忠実な行為です。
罪は単に人間の過ち、人間にだけ
加える害ではなく、神への侮辱、
創造主の掟を破り、父の愛に背く
ことなのです。罪を心理的にのみ
捉えることはできません。罪は神
との関係において重要な意味を持っ

ているのです。

5 イエズスは放蕩息子のだと
えて、父の威厳と家に対す
る息子の侮辱的行為を通して、罪
が御父の愛に対する侮辱であるこ
とをお示しになりました。息子が
陥った悲劇的状況は、アダムの状
況、つまり最初の罪によって墮落
した状況を表しています。しかし
このたとえでイエズスがお示しに
なつたのは、御父のあふれるはか
りの愛でした。心慰められる愛。
確かな愛。父親は放蕩息子を見つ
け、走り寄って肩を抱き、迎え入
れ、赦し、罪の結果を取り消し、
息子の新たな命を祝ってやります。
(ルカ 15・11-32参照) 希望が
心にわいてきます。キリスト教の
長い歴史を通して、いかに多くの
人々がルカの記すこのたとえを読
んで神に立ち返ったことでしょう。
ルカが「キリストのやさしさの記
述者」と呼ばれるのももつともで
す。告解の秘跡は、イエズスが与
えてくださった御父の善と愛の現
れなのです。

6 次に、罪は教会に加えられ
た傷であると教えています。
事実、全ての罪は教会の聖性に害
を加えます。一つとなるべきキリ
スト教共同体全体に影響を及ぼさ
ない罪はないでしょう。一人の人
によって行われた善が他の全ての
人に利益と助けをもたらすことが
事実であれば、残念ながら一人の
人が犯した悪が全ての人の目標で
ある完全を妨げることも事実です。
完全を求める全ての人が全世界を

高めるとすれば、神の愛を裏切る
すべての行為が人間の状態を悪く
し、教会を衰えさせることも事実
なのです。神と和解することは教
会と和解することですが、それは
ある意味で、すべての被造物と和
解することでもあります。その調
和は罪によって破られるのです。
そこで教会は和解の仲介者となり
ます。それは創始者によって教会
に課せられた役目です。主は教会
に「罪の赦し」の使命と権能をお
与えになりました。はっきりと、
あるいは暗黙のうちに、意識的に、
あるいは無意識のうちに、教会に
おいて神との和解が常に起ってい
ます。聖トマス・アキナスは神
秘体の一致について次のように記
しています。「神秘体の一致がな
ければ、救いはないであろう。大
洪水のとき教会であるノアの箱船
の外には誰もいなかったように(1
ペトロ 3・20-21) 教会の外には
救いの入り口はないのだから。」
(前掲書 III, q. 73, a.3; cf. Suppl.
III, p. q. 17, a.1) 確かに赦す権
能は神のものであり、罪の赦しは
聖霊のお働きです。その赦しはキ
リストの十字架による贖いによつ
て罪人にもたらされます。キリス
トは御名において全世界に救いを
もたらす使命を教会に委ねられま
した。(エフェソ 1・7、コロサ
イ 1・14、20参照; III, p. 84, a.1
参照) 赦しは神に願うもの、神
から与えられるものです。万人の
救いのためにイエズス・キリスト
が建てられた教会の仲介を通して。

高めるとすれば、神の愛を裏切る
すべての行為が人間の状態を悪く
し、教会を衰えさせることも事実
なのです。神と和解することは教
会と和解することですが、それは
ある意味で、すべての被造物と和
解することでもあります。その調
和は罪によって破られるのです。
そこで教会は和解の仲介者となり
ます。それは創始者によって教会
に課せられた役目です。主は教会
に「罪の赦し」の使命と権能をお
与えになりました。はっきりと、
あるいは暗黙のうちに、意識的に、
あるいは無意識のうちに、教会に
おいて神との和解が常に起ってい
ます。聖トマス・アキナスは神
秘体の一致について次のように記
しています。「神秘体の一致がな
ければ、救いはないであろう。大
洪水のとき教会であるノアの箱船
の外には誰もいなかったように(1
ペトロ 3・20-21) 教会の外には
救いの入り口はないのだから。」
(前掲書 III, q. 73, a.3; cf. Suppl.
III, p. q. 17, a.1) 確かに赦す権
能は神のものであり、罪の赦しは
聖霊のお働きです。その赦しはキ
リストの十字架による贖いによつ
て罪人にもたらされます。キリス
トは御名において全世界に救いを
もたらす使命を教会に委ねられま
した。(エフェソ 1・7、コロサ
イ 1・14、20参照; III, p. 84, a.1
参照) 赦しは神に願うもの、神
から与えられるものです。万人の
救いのためにイエズス・キリスト
が建てられた教会の仲介を通して。

7 イエズス・キリストのご受
難とご死去の裏りにあずか
ることができるよう、キリストは
弟子たちに罪を赦す権能をお与え
になりました。「あなたたちが罪
を赦す人にはその罪が赦され、あ
なたたちが罪を赦さぬ人は赦され
ない。」(ヨハネ 20・23) 教会
では、使徒たちの使命と権能を受
け継いだ司祭が、キリストの名に
おいて罪を赦します。赦しの秘跡
における司祭に固有の職務は、信
者の「共通司祭職」の実行を妨げ
ることなく、むしろそれを含んで
います。その信者は聖霊の働きの
もとに罪を告白し、赦しを願いま
す。聖霊が、贖い主キリストの恩
寵を通して、内的に改心させてく
ださるのです。信者のこの役割に
ついて述べるとき、聖トマスは聖
アウグスティヌスの有名な言葉を
引用しています。「あなたなしで
あなたを創造された御方が、あな
たなしであなたを赦免(義化)さ
れることはない。」(Super Iohannem,
serm. 169, c.11; 聖トマス、神学大
全 III, q. 84, aa.57)

赦しの秘跡におけるキリスト信
者の積極的な役割とは、特別な場
合を除いて個人的に司祭に「告白」
して自分の過ちを認めること、神
に加えた侮辱を痛悔すること、神
聖徒」の交わりに戻る恩寵を受け
られるよう、愛と模範と祈りの一
致で助けられます。このように
赦しの秘跡は、諸聖徒の交わりで
ある教会が慈悲と赦しの司祭的共
同体であることを示しているの
です。(九二・四・十五)

しとして司祭が命じる「償い」を
果たすこと、そしてその後、受けた
赦しに感謝することです。

8 先に述べたことは全て、神
との友好関係を破り「永遠
の命」を奪う罪にあてはまるとい
う事実を思い起すのは良いこと
です。この種の罪を「死をもたらす
罪、つまり大罪」と呼びます。一
つでも大罪があれば赦しの秘跡に
あずからなければなりません。(ト
リエント公会議 DS107参照) と
ころで、秘跡が与える赦しの効果
を信じるキリスト信者は、必要で
ない時でも(大罪がなくても)し
ばしばこの秘跡にあずかります。
そうすれば、良心を鋭くし、さら
に清くなり、平安の源を見つけ、
誘惑を退ける力を受け、神の掟と
愛の要求にもっとよく応えるため
に戦うことができるからです。

9 公会議も教えているとおり、
「愛と模範と祈りによつて
自分たちの改心のために努力して
いる」(教会憲章11番) 教会は、
一人ひとりのキリスト信者のそば
にいます。信者は、たとえ罪の状
態にあつても決して一人はつちで
はありません。信者はいつも「司
祭的共同体」の一員です。司祭的
共同体は、神との愛の関係、「諸
聖徒」の交わりに戻る恩寵を受け
られるよう、愛と模範と祈りの一
致で助けられます。このように
赦しの秘跡は、諸聖徒の交わりで
ある教会が慈悲と赦しの司祭的共
同体であることを示しているの
です。(九二・四・十五)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説
なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円
送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入な
ら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393